文学部

石橋 悠人ゼミ

ISHIBASHI YUTO SEMINAR

それぞれが研究し、互いに高め合い、歴史を紐解く

私たちのゼミでは、西洋近代、およそ16世紀から19世紀までを研究しています。ゼミ生一人ひとりが興味を持った主題を選び、その対象は貿易から音楽までとさまざまです。授業は発表が主で、2019年度は年3回の発表を予定しています。先生からアドバイスをいただいたり、学生同士で質問をし合ったりしながら、3年次におけるゼミ論、そして大学4年間の集大成である卒論に向けて、日々努力を重ねています。

石橋先生とゼミ生たち

机をロの字型にして発表を行う

ゼミ生それぞれが選んだテーマを追究

人間の歴史において研究対象となる主題は無数に存在します。政治、経済から絵画や文学、最近ではジェンダーなど、あらゆる人の営みを理解し、解釈することが歴史学の目的だと私は考えています。その対象は紀元前4000年ごろの古代メソポタミアからアメリカ同時多発テロ事件などの2000年代の出来事までと非常に幅広いものですが、そのなかでも私たちのゼミでは西洋近代、主に16世紀から19世紀の事象を扱っています。

また、ゼミ生それぞれが関心のある時代や国からテーマを決定して研究を進め、私は19世紀ヴィクトリア朝イギリスを専攻しています。A・C・ドイルの「シャーロック・ホームズ」シリーズをはじめ、ヴィクトリア朝には現代においてもなお人気を博す小説が数多く生み出されました。加えて、1859年に出版されたチャールズ・ダーウィンの『種の起源』に代表されるような進化論が大きく発展し、普及した時代でもあります。この時代の重要な特徴といえるこの二つの事柄をもとに、R・L・スティーヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』やH・G・ウェルズの『タイム・マシン』などといった、当時の小説のなかに見られる進化論の影響について考察しています。この登場人物はなぜそのような容姿をしているのか、なぜあのような行動をとったのか、また作者がなぜ本文でその単語を使っているのかなど、多くの視点から物語を読み解いていきます。これらの作品は、ただ読むだけでも十分に楽しめるものですが、当時の社会状況や思想と照らし合わせることで、ファンタジックなフィクションの世界に確かな「現実」を見ることができます。単純な創作物としてではなく、歴史的資

三村 莉穂（みむら りほ）
文学部人文社会学科西洋史学専攻3年
栃木県立宇都宮女子高校出身

料として小説を読むことには、単なる読書とは違った意義や楽しみがあるのです。

新しい気づきが得られる発表の時間

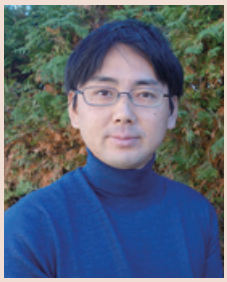
ゼミの時間では、一人ひとりが研究の成果について報告します。テーブルをロの字型に配置し、互いの顔が見えやすいような形で発表します。一人あたりの報告は、質疑応答などを含め50分ほどで行います。また2019年度の夏季休暇明けには、それぞれの研究の一次資料について、後世に書かれた書籍や論文ではなく、その当時に書かれた文書の読解と分析を行いました。日本語訳はもちろん、英語、フランス語などで書かれた原文にあたる学生もおり、非常にバラエティーに富んだ発表となりました。

定期的に皆の前で発表を行うためには、そのたびに自分の現在の進捗状況を専門外の人にもわかるように整理しなければなりません。それは一筋縄ではいかない作業ですが、レジュメにまとめて自らの言葉で説明することは、自分の状況を再確認することにつながり、より深く実感をもって研究内容を理解することにもつながります。また、発表後に石橋先生から適した資料や改善点などのアドバイスをいただくことで新たな手がかりを得たり、次に何をすべきかなど先のビジョンをより明確にしたりすることができます。

さらに、他のゼミ生から質問を受けることで、今まで自分が気づいていなかった疑問点や補完すべき内容が明らかになることも多く、質疑応答の時間は毎回複数の質問を互いに投げ合います。加えて、たとえテーマが個々で違ったものだとしても、他のゼミ生の発表から自分の研究に活かせることを多く学ぶことができます。これまでも近い時代のテーマはいうまでもなく、年代や地域がまるで異なっていたとしても、着眼点やアプローチの方法など、とても参考になる発表が多々ありました。

このようにして研究を進めていき、学期末には1年間の成果をゼミ論の執筆という形でまとめ上げます。また、多くの場合はゼミ論の内容をそのまま卒論に引き継いでいくため、このゼミで学んだことが大学4年間すべての集大成になるといえるでしょう。史学は決して単純な暗記などではなく、無限に追究し続けることを必要とする学問です。研究においてはそう簡単に結果を出すことはできません。しかし、私はそのようななかでもこのゼミで学んだこと、またこれから学ぶことを最大限に生かし、自分の専攻する主題について、その調査や解釈をもとに一つの答えを導き出せるよう、引き続き切磋琢磨して取り組んでいきたいと思います。

質疑応答での様子



文学部准教授
石橋（いしばし） 悠人（ゆうと）

歴史の「書き手」になる

私たちのゼミには西洋近代史に関心を持つ学生が集まり、卒論に向けた研究について教員や学生から助言を得ることができる貴重な場となっています。学生同士で知的な刺激を与え合い、協同的な学びを実現できる空間を作りたいと願っています。

これから卒論執筆に入る皆さんには、自分が歴史の「書き手」になるという気持ちを強く持ってほしいと思います。歴史学に関する講義では多様な時代・地域の歴史を知識として学び、演習では先生が定めた本や論文を読むことでしょう。それに対して、卒論では自らが「主役」となって資料や文献を一から調査し、他の研究者の議論と突き合わせ、過去の出来事の意味を深く考え、独自の歴史の図柄を描き出すことが大切な目標になります。

歴史の「書き手」の立場になると、無数にある過去の出来事や人物・現象、さらに多くの文献のなかから一部を選び取って記述することでしょう。その際には皆さんの歴史理解、解釈の根拠、立ち上げてゆきたい歴史像が問われます。史料や論文の考察に基づき、しっかりと「根拠」を示すことが必要です。他の著作から抜き書きしたような「借り物」の言葉ではなく、多少粗削りであっても、自分の言葉で表現することもとても大事です。皆さんが歴史の「書き手」として全力投球する卒論を読むことを今から楽しみにしています。